

- 安房地域は、生産量日本一の食用なばな産地であるが、**高齢化や根こぶ病**などにより産地規模が縮小して出荷量が低下し、産地の再構築が課題
- 生産者アンケートと聞き取りから産地の問題点を整理、**関係機関で連携会議をたちあげ**、産地振興を役割分担と情報共有を図りながら推進
- 関係機関が一体となって、対策を実施したことで**新たな担い手も育成され**、出荷量の低下を食い止めた。
- 加工業務用に取り組む若手5名の組織化を支援**し、19haを栽培

## 具体的な成果

### 1 産地を維持する担い手の育成

- 新規栽培者の確保を目指した「食用ナバナチャレンジセミナー」を開催



5年間で143名が受講し  
62名が新たに出荷を開始

### 2 労力補完体制の構築

- 生産者が苦勞していた作業のうち、堆肥散布、耕起、畝立ての請負システムを確立



堆肥散布 360t

### 3 根こぶ病対策の強化

- 各種展示ほを活用し、総合的な防除を提案



- 1 病原菌密度分布の解明
  - 2 薬剤防除
  - 3 石灰資材等のpH上昇による発病抑制
  - 4 おとり作物による菌密度低下
- 各種対策の実施者 72%

### 4 加工業務用の取組拡大

- 若手5名の組織化を支援
- 面積拡大を技術的、経営的に支援
- 販路拡大を提案

#### ①栽培面積

H23:0ha → H27:19ha

## 普及指導員の活動

平成22年～

- 加工業務に取り組む生産者を組織化

平成23年

- 食用ナバナチャレンジセミナーを開催し新規取組者の掘り起こしを開始
- JAと生産者による新規取組者の支援体制づくり
- 中核的担い手66戸への戸別巡回を実施、JAとともに重点的な指導を開始

平成24年～現在

- 食用なばな連携会議、食用ナバナ実務担当者会議を開催
- 一般財団法人南房総農業支援センターによる労力補完システムがスタート
- 加工業務用に取り組む生産者の商談会参加を支援
- 根こぶ病総合防除対策の実施

## 普及指導員だからできたこと

・関係機関のコーディネートで普及が行ったことで、それぞれの得意な分野で活動実施できた

・今後の産地の担い手を明確化し、意欲的な生産者への活動を強化した  
・関係機関の信頼関係をもとに情報を共有し農家への働きかけを効果的に展開できた

千葉県

## 日本一の食用なばな産地維持に向けて

活動期間：平成23年度～(継続中)

### 1. 取組の背景

安房地域は温暖な気候を活かし70年以上の歴史がある生産量日本一の食用なばなの産地であるが、高齢化や担い手の減少、主要病害である根こぶ病の被害拡大等によって、出荷量が減少し続けてきた。

そこで安房農業協同組合と連携して生産者へのアンケートを実施し産地が抱える問題を整理したところ、①70歳以上の生産者が50.4%であり将来に生産者の減少が予測されること、②主要病害である根こぶ病が23.8%の生産者において発生していること等により出荷量が減少していること、の2点が明らかとなった。

産地の維持に向けては、①産地を維持する担い手の育成と労力補完体制の構築、②増産に向けた根こぶ病対策の確立の2点を主なねらいとして活動に取り組むこととした。なお、活動は、関係機関と産地振興に係る連携会議を立ち上げ、役割分担と情報共有を図りながら進めた。



### 2. 活動内容（詳細）

#### (1) 産地を維持する担い手の育成

食用なばな生産者を新規に育成するため、平成23年度から「食用ナバナチャレンジセミナー」を毎年開催し、ほ場づくりから、播種、収穫、そして主力商品の荷姿である束調製まで、実践的な研修を行った。セミナーは安房農業協同組合、及びJA安房菜の花部会及び（一財）南房総農業支援センターの協力を得て実施した。



#### (2) 労力補完システムの構築

生産者に対してアンケートを実施し、どのような点に苦勞しているのかを調査した結果、高齢化に伴って堆肥散布や畝立等の作業に最も苦勞していることが明らかとなった。これを受けて、関係機関とともに重労働を伴う作業に対する労力補完体制の構築に向けた協議を進めた。



### (3) 増産に向けた根こぶ病対策の確立

主要病害である根こぶ病対策では、千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所、安房農業協同組合及び全国農業協同組合連合会千葉県本部とともに対策会議を立ち上げ、安房地域の栽培ほ場における病原菌密度分布の解明や薬剤による防除、石灰資材や転炉スラグを用いたpH上昇による発病抑制、おとり作物による病原菌密度の軽減などの対策技術について、役割を分担して実施することにより早期に対策を確立できるよう取り組んだ。

### (4) 加工業務用取組の推進

地域特産の食用なばなを経営の柱とする経営体の育成を目指して、加工業務用取組の推進を図った。技術確立を進め、賛同者3名でネットワーク組織を設立した。

その後も栽培者の掘り起こしを行うとともに、省力低コスト栽培技術の確立支援を実施し、更に加工業務用野菜としての販路拡大に向けて商談会への参加やリスク管理への対応を促した。



## 3. 具体的な成果（詳細）

### (1) 産地を維持する担い手の育成

平成23～27年度の5年間で累計143名が参加し、このうち62名が新規に出荷を開始し、新たな食用なばな出荷者として育成された。

またJA安房菜の花部会において、各支部役員がそれぞれの居住地域に在住するセミナー生の技術相談窓口となる体制づくりが進められ、地域の役員が新規栽培者を育成していく意識が醸成された。

### (2) 労力補完システムの構築

平成24年に安房農業協同組合と南房総市が出資して一般財団法人南房総農業支援センターを設立した。生産者が苦勞していた作業のうち、堆肥散布、耕耘、畝立て及び施肥を請け負う事業を展開するに至っている。

### (3) 根こぶ病対策の強化

関係機関が役割分担して各種試験を行った結果、抵抗性品種の活用、薬剤による防除、石灰資材や転炉スラグを用いたpH矯正による発病抑制などの各対策技術の効果が確認された。

生産者は、ほ場の発病程度やpHなどのほ場条件に応じて、これらの対策の中から適したものを実施することにより、根こぶ病の被害を軽減できることがわかった。

#### (4) 加工業務用の取組拡大

加工業務用出荷を行う若手組織が1組合育成され、畝立成型機、畝内施肥機、播種機、乗用防除機などを装備した。組織構成員も3戸から5戸に増え、現在5戸で19haを栽培するに至っており、更なる拡大を目指している。なお、構成員の2戸は法人経営体となっている。

### 4. 農家等からの評価・コメント

#### (1) JA安房菜の花部会 会長 A氏

「食用ナバナチャレンジセミナー」は、産地にとって画期的な取組です。JA安房菜の花部会としても最大限の協力を続け、食用なばなの新規出荷者を育成していきます。

#### (2) 南総なばなネット 会員 B氏

以前は別の品目を経営の柱としていましたが、現在では、食用ナバナを経営の柱とすることによって、規模拡大や雇用導入が実現し、経営拡大を進めることができています。

### 5. 普及指導員のコメント

#### (1) 安房農業事務所 普及指導員 橋本威

普及が関係機関のコーディネートを行うことで役割分担が明確になり効果的な活動につながりました。日本一の産地の維持発展させるため、関係機関の連携を十分に行うことにより、効果的な活動を行っていけるよう、これからも取組を進めていきます。

### 6. 現状・今後の展開等

これまでの活動成果により出荷量は再び増加し始めたが、最盛期の出荷量には至っていないため、出荷量の増加に向けて継続した活動が必要である。

今後は、①食用なばなチャレンジセミナー修了者の就農定着促進、②根こぶ病対策技術のマニュアル化、③播種期の台風や大雨対策としての移植栽培の推進、④収穫調製作業の省力化及び効率化⑤担い手の育成などの課題に取り組む。

引き続き関係機関及びJA安房菜の花部会との連携と役割分担を行いながら、また各種事業などを積極的に活用し、当地域のブランドである食用なばなの振興を支援していく。